

平成 27 年度芝古墳発掘調査 現地説明会資料

1 はじめに

- ・この調査は、乙訓古墳群の国史跡指定に向けた主要古墳の実態解明を目的として実施しています。
- ・この古墳は、京都市西京区大原野石見町 6 3 2-3 に所在する古墳時代後期の前方後円墳です。
- ・調査期間は、平成 27 年 10 月 1 日から 11 月中旬まで、面積は約 80 m² の予定です。
- ・調査は、平成 27 年度国庫補助事業として実施しており、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が担当しました。

2 古墳の概要

- ・形態と時期 古墳時代後期の前方後円墳
- ・規模 全長 38 m 以上、墳丘長 32.7 m、後円部の直径約 22.4 m、前方部長約 10.3 m、後円部高約 3.6 m、前方部高約 3.4 m
- ・主体部 横穴式石室（右片袖式）
- ・外表施設 段築未確認、葺石なし、埴輪、周溝ないし周濠（全周せず）
- ・埴輪 円筒埴輪（4 条突帯 5 段）、朝顔形円筒埴輪（穴窯焼成）
- ・その他 後円部の中央から外側に向かってのびる石組み溝を 2 基確認。



図 1 芝古墳の位置図

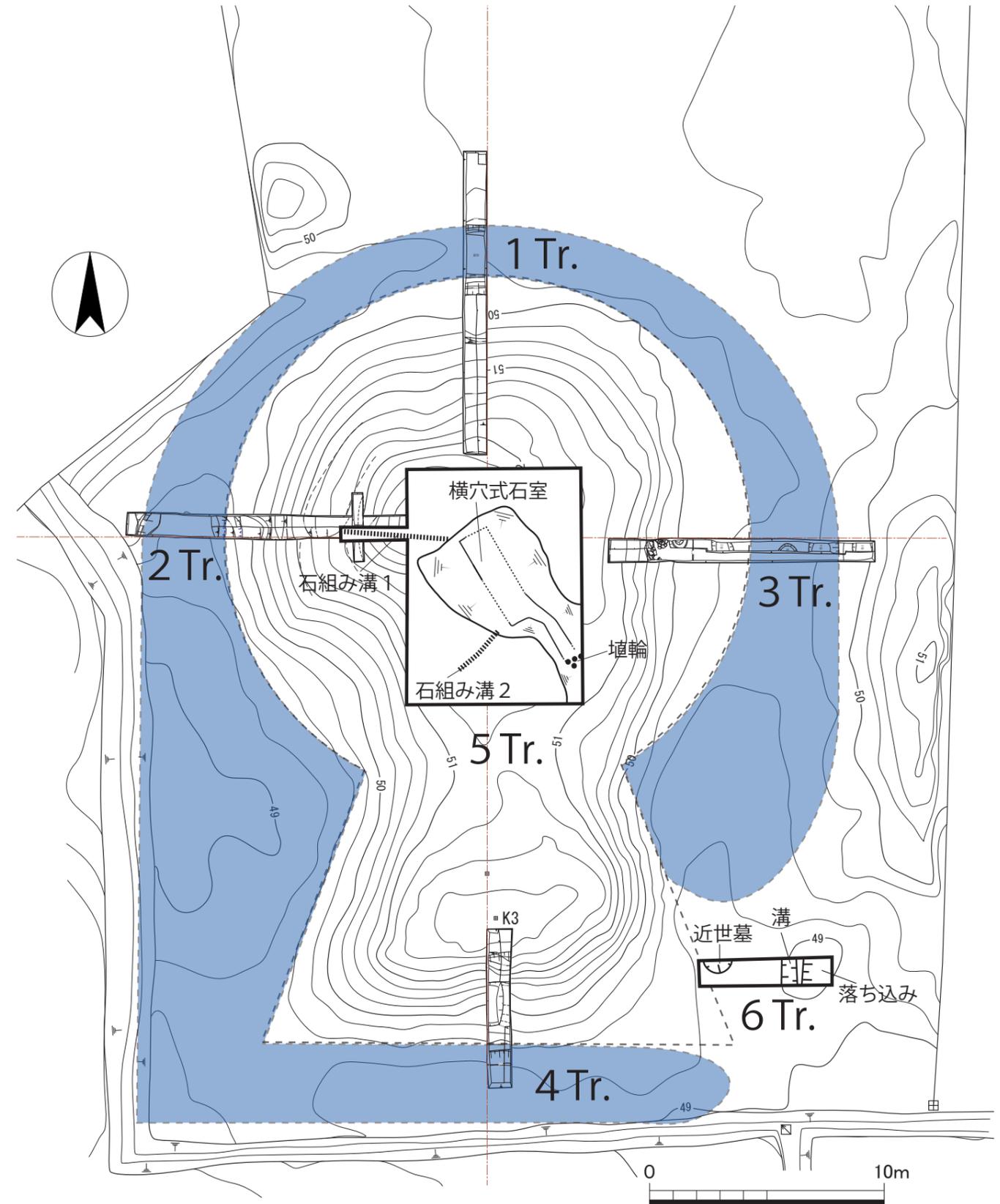


図 2 芝古墳の墳丘と調査区

3 芝古墳群について

京都市域では、これまでに800基以上の古墳（群）が確認されています。そのほとんどは、京都盆地を囲む三方の山々の近くに分布しており、平安京のあった範囲ではこれまでに3基しか確認されていません。京都盆地の西側では、嵯峨野や桂川右岸の乙訓と呼ばれる地域に多くの古墳が分布しており、全国的にも有名です。芝古墳は、古墳時代後期に造られた前方後円墳であり、乙訓地域の首長墓の1基と考えられています。

そもそも芝古墳は芝古墳群に属する1基であり、芝1号墳とも呼ばれています。芝古墳群は、桂川の支流である小畑川によって形成された標高50mほどの低位段丘上に立地しています。現在の京都市西京区大原野石見町から長岡京市井ノ内頭本・向井芝、今里口山にかけて分布しており、前方後円墳1基、円墳12基、方墳1基の計14基の古墳で構成されます。しかし、この芝古墳の付近は筍の生産地として有名であり、土取りのために消滅した古墳も少なくないと考えられます。事実、芝14号墳は大正7年に土取りにより破壊されています。また、周辺では現時点では確認されていない時期の古墳の遺物なども発見されており、この近辺に所在した古墳の数が増える可能性は高いと考えられます。

さて、芝古墳群ではこれまで正式な調査はほとんど実施されていません。昭和42年に京都府教育委員会によって分布調査が行われて以降は、平成25年度の京都市による測量調査まで手付かずの状況であり、情報は限られています。京都市の調査以前の芝古墳群の情報をまとめると以下ようになります。

まず、芝古墳群で時期がある程度判明している古墳は2基存在します。出土した遺物等から、12号墳が7世紀前半、14号墳が6世紀中ごろに位置づけられます。この他には、4号墳と10号墳が木棺直葬と想定されている程度に過ぎません。芝古墳に関しては更に情報が少なく、測量図から全長32m程度の前方後円墳であることが知られるのみで、埋葬施設・外表施設・築造時期などは不明であり、これまで研究者によって異なる見解が示されてきました。特に築造時期に関しては5世紀前葉から6世紀後葉と長い時期幅で考えられていました。

芝古墳は、付近に所在する近接した時期に築かれた井ノ内車塚古墳や井ノ内稲荷塚古墳などと同じくこの付近を治めた首長の墓と考えられており、乙訓地域の政治的動向を考える上で欠かすことのできない古墳です。しかしながら、その様相は良く分かっていませんでした。そのような状況を鑑み、京都市では平成25年度から継続的な調査を実施しています。平成25年度は、測量調査を実施して墳丘とその周辺の状況を明らかにしました。そして、平成26年度には墳形や規模等を確定するための発掘調査を実施し、以下の成果を得ています。

- ① 規模が判明した。(墳丘長32.7m、全長38.3m以上)
- ② 周溝と埴輪を有することが判明した。
- ③ 後円部において埋葬施設に伴う可能性のある石組み溝を検出した。
- ④ 墳丘構築法の一端が明らかになった。
- ⑤ 築造時期が判明した（5世紀末～6世紀初頭）

今回の調査は、すべての調査を含めると第4次調査、発掘調査に限れば第2次調査となります。以下、各調査区で判明したことを説明します。

4 各調査区の状況

● 1～4トレンチ（平成26年度の調査区）

古墳の規模や周濠の有無、墳丘盛土の様相を確認するための調査区です。平成26年度に調査を実施しました。各調査区で墳丘盛土や周溝を検出しています。2トレンチで古墳に伴う石組み溝を検出されたことは特筆されます。今年度は、2トレンチと一部重複するように調査区を設けており、この延長を確認しています。

● 5トレンチ

後円部の中央に設けた調査区です。2トレンチと一部重複しています。この調査区では、2トレンチで確認された石組み溝の延長部と埋葬施設の遺存状況の確認を目的としました。

この調査区では、平成26年度の調査時に確認した石組み溝の延長と、それとは別に後円部の中央から西側くびれ部にむかってのびる石組み溝も検出しています。また、この調査区で芝古墳の埋葬施設と考えられる横穴式石室を確認したことは特筆されます。

石組み溝1・・・平成26年度の調査時に確認した石組み溝です。墳丘の外側から後円部の中心に向かってのびており、墳丘の構築と併行して構築されたものと考えられます。底石・左右の側石・蓋石からなり、底石を両側石で挟みこみ、その上に蓋石を配する構造です。石材の平坦な面を利用して構築しており、断面は「ロ」字形を呈します。石材は、主にチャートの河原石を使用しており、石材の大きさは人頭大です。平成26年度の調査では、外側から数えて10石目の蓋石までしか確認できていませんでしたが、今回の調査では19石目の蓋石まで確認することが出来ました。残念なことに、19石目以降は後世の攪乱により既に破壊されています。規模は、幅0.5m、長さ4.2m以上になります。

石組み溝2・・・今回の調査で新たに確認した石組み溝です。後円部の中心から南へ4mほどの位置から西側くびれ部に向かって伸びていきます。この遺構の両端は破壊されており部分的にしか残存していません。規模は幅0.35m、長さ2.2m以上で、蓋石は11石目まで確認できます。構造や構築のタイミングは石組み溝1と共通します。

横穴式石室・・・後円部中央は、盗掘など後世の破壊を受けたために深さ2m以上の大きな凹みが存在しており、埋葬施設などは既に破壊された可能性が高いと考えられていました。しかしながら、今回の調査では埋葬施設と考えられる横穴式石室を検出することが出来ました。天井石や石室の石材は抜き取られ、保存状態はそれほど良いとはいえませんが、部分的に残った石材から大体の様相を復元できます。石室は、右片袖式の横穴式石室です。規模は、羨道が幅約0.5mで長さ2m以上、石室が幅約1.5mで長さが約4mとなり、石室の平面形は長方形を呈します。羨道には梱石が認められ、延長部では埴輪が4基ほどまとまって出土しています。現時点では、この埴輪が古墳築造当初のものかは不明ですが、位置や出土状況は非常に興味深いものです。

● 6トレンチ

前方部東側の調査区です。墳丘盛土の残存状況や周溝の有無の確認することを目的としました。この調査区では、近世墓や溝、落ち込みを1基ずつ検出しましたが、いずれも古墳に伴う遺構ではないと考えられます。現在、地表面に敷かれている竹チップの直下で地山を確認しており、この付近には周溝が存在しなかったもの

と考えられます。

近世墓・・・直径1.3 m、深さ0.8 mほどの規模を測ります。遺物は出土していませんが、掘り込みの位置や形状から近世墓と考えられます。3トレンチでは、狭い調査範囲ながら5基もの近世墓を確認していますが、6トレンチでは1基しか確認できないため、北側に多くの近世墓が営まれたと推定されます。

溝・・・長さ1 m以上、幅0.7 m、深さ0.4 mほどの規模となります。南北方向にのびる溝で、この中から埴輪片や須恵器片がごく少量出土しました。切り合い関係から、この溝は落ち込みよりも新しい遺構と考えられます。

落ち込み・・・幅1.2 m以上、深さ0.6 mの規模となります。6トレンチでは、この落ち込みの西肩口しか確認できておらず、調査区外でどのように展開するかは不明です。この落ち込みの中からは、埴輪片や須恵器片がごく少量出土しました。

4 まとめ 今回の調査で分かったこと

以上のように、今年度の調査でも非常に興味深い成果を得ることが出来ました。今調査の成果をまとめると以下ようになります。

- ① 埋葬施設が横穴式石室であることが判明した。
- ② 平成26年度の調査で検出した石組み溝の延長部を確認した。
- ③ ②とは別の位置に同じ形態を有する石組み溝が存在することが判明した。
- ④ 樹立している可能性のある埴輪群を検出した。
- ⑤ 周溝が全周しないことが判明した。

中でも、埋葬施設が横穴式石室であることが判明したことは大きな意義があります。これまで、芝古墳の埋葬施設は木棺直葬と考えられていましたが、昨年度の調査で確認した石組み溝の存在から竪穴系の埋葬施設を有する可能性も浮上していました。しかし、今回確認した横穴式石室は墳丘と併行して構築されており、この古墳本来の埋葬施設である可能性が高いと考えられます。その場合、芝古墳の横穴式石室が乙訓地域で最古の横穴式石室となり、この地域の横穴式石室の在り方を考える上でも非常に興味深い成果と言えます。

横穴式石室と検出した2基の石組み溝や埴輪群との関係も注目されます。石組み溝は、一般的に埋葬施設に伴う排水溝と同じ形態ですが、芝古墳で検出したものは墳丘と併行して構築されているにも関わらず、埋葬施設の排水を意図したものとは考えられません。位置関係から石組み溝は玄室の南西角と北西角に取りつく可能性がありますが、他にこのような類例はなく性格は不明です。埴輪群については、現状ではこの古墳に伴うものであるかはまだ不明です。しかし、後世の段階でわざわざ埴輪を集積するとは考えにくく、また、羨道の延長線上に位置することから石室の入り口の目印として樹立された可能性が想定できます。

この他に、周溝が墳丘南東部には存在しないことも、本来の古墳の姿を復元する上で興味深いものです。特に、東側のくびれ部付近には横穴式石室への入り口があったと考えられ、何らかの関係を想定できます。

これまでの調査によって芝古墳の全容が少しずつ明らかになり、周辺の古墳と比較する材料も集まってきています。地道な調査と研究を行うことで、この地域の古墳時代の動向はより一層明確になっていく事でしょう。



図3 芝古墳の墳丘（南西から）



図4 芝古墳出土の円筒埴輪（平成26年度調査）



図5 石組み溝1 (東から)



図6 石組み溝2 (南西から)



図7 横穴式石室 (北東より)



装飾付須恵器片



装飾付須恵器 (猪)



装飾付須恵器 (犬)



埴輪



鉄器

図8 出土遺物